

# 帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
10周年記念号

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージしました。

## CONTENTS

特集1 開館10周年を迎えて	P.2~3
特集2 新潟市歴史博物館開館10周年記念特別展 大新潟湊展	P.4
館長日記 淳足柵設置とミナト —「大新潟湊展」に寄せて—	P.5
施設紹介 みなとぴあはこんなところですよ！ —10年目のおさらい—	P.5
みなとぴあへの メッセージ みなとぴあとの出会いと期待 新潟の町・グッドなアクション	P.6
たいけんの場としてのみなとぴあ 市民の活動の場としてのみなとぴあ	P.7

みなとぴあは  
開館一〇周年を迎えます

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆檣成林

10周年  
記念号



早朝のみなとぴあ

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」一〇周年記念号  
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
■ 印刷／株式会社アステーション  
■ 発行日 平成26年2月21日

## 大新潟湊展

“みなと”として歩んできた新潟の歴史を踏まえ、江戸から明治にかけての新潟湊の果たした役割と特色を紹介します。

**【会 期】** 2014年 **3月21日(金)～5月18日(日)**  
**【休 館 日】** 3月24日(月)・25日(火)・31日(月)・4月7日(月)・14日(月)・21日(月)・5月7日(水)・12日(月)  
※4月28日(月)・30日(水)は臨時開館  
**【観 覧 料】** 一般 **600円(480円)** 高校生・大学生 **400円(320円)** 小学生・中学生 **200円(160円)**  
( )は団体料金  
※小・中学生は土日祝日無料 ※企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます。

**【関連企画】 ◆講演会①「湊町新潟に生きた人々」**  
日時：3月22日(土) 午後1時30分～午後3時  
講師：伊東 祐之(当館副館長)  
会場：新潟市歴史博物館 2階 セミナー室  
定員：80名  
申込：往復はがき、またはメールに氏名・連絡先電話番号・住所・講演会タイトルをご記入の上、みなとぴあ大新潟湊展講演会係までお送り下さい。  
応募者多数の場合は抽選いたします。  
締切：3月13日(木) 必着

**◆講演会②「日本海海運と新潟湊」**  
日時：5月11日(日) 午後1時30分～午後3時  
講師：原 直史氏(新潟大学教授)  
会場：新潟市歴史博物館 2階 セミナー室  
定員：80名  
申込：往復はがき、またはメールに氏名・連絡先電話番号・住所・講演会タイトルをご記入の上、みなとぴあ大新潟湊展講演会係までお送り下さい。  
応募者多数の場合は抽選いたします。  
締切：4月24日(木) 必着

※各回別々にお申し込み下さい。

◆イベント ※協力：国土交通省北陸地方整備局新潟港湾空港整備事務所

「“みなと”を船で見てみよう」 港湾業務艇あさひに乗船して新潟西港内をめぐります。

日時：4月19日(土) 出航時間(1)10時(2)11時(3)13時30分(4)14時30分

定員：各回12名(小学生以上。小学生の場合は保護者同伴)

料金：200円(保険料)

申込：往復はがき、またはメールに氏名・年齢・連絡先電話番号・住所・イベント名をご記入の上、みなとぴあ乗船体験係までお申し込み下さい。  
応募者多数の場合は抽選いたします。

締切：4月10日(木) 必着

◆展示解説会

日時：会期中の毎週日曜日

午後2時から(30分程度)

事前申し込み不要(当日の観覧券が必要)

※5月11日(日)は午後3時から

◆ミニ講座「展示古文書の解説」

日時：4月26日(土)、5月17日(土)

午後2時から(30分程度)

場所：新潟市歴史博物館 2階 セミナー室

事前申し込み不要 参加無料

## 新潟地震展

今年は新潟地震から50年、中越地震から10年の節目の年に当たります。

それらの地震を含む過去に新潟で起きた地震と、その時々の人々について紹介します。

**【会 期】** 2014年 **6月14日(土)～8月24日(日)**

**【休 館 日】** 6月23日(月)・30日(月)  
7月7日(月)・14日(月)・22日(火)・28日(月)  
8月4日(月)・18日(月)  
※6月16日(月)・8月11日(月)は臨時開館

**【観 覧 料】** 一般 **500円(400円)**  
高校生・大学生 **300円(240円)**  
小学生・中学生 **200円(160円)**  
( )は団体料金

※小・中学生は土日祝日無料

※企画展示観覧券で常設展示も

御覧いただけます。

## 編集後記

みなとぴあは2014年3月27日に開館10周年を迎えます。今までみなとぴあに関わってくださった全ての方にも感謝申し上げます。さて、今回は記念号ということで、いつもみなとぴあを陰に日向に支えてくださっている方々にも記事に参加していただきました。多くの方がみなとぴあを支えているということがお分かりいただけるかと思えます。その繋がりを大事にしながら、みなとぴあは活動していきます。これからもみなとぴあをよろしくお願い致します。(早川)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとぴあ

住 所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10

T E L：025-225-6111 F A X：025-225-6130 E-MAIL：museum@nchm.jp

休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9：30～17：00(3/31まで) 9：30～18：00(4/1から)





# 開館10周年を迎えて

伊東 祐之

## はじめに

新潟市歴史博物館は開館一〇周年を迎えます。それを記念して「大新潟湊展」と題して、湊町新潟の変化やしくみ、営みについて考える企画展を開催します。当館は条例で「新潟市の歴史的特性を明らかにし、市民の歴史に対する理解を深めるとともに、歴史を媒介とした市民交流を行うことにより、市民の社会的活動及び文化的活動に寄与する」ことを設置目的とすると規定されています。湊町新潟の歴史は、新潟市の歴史的特性を語るうえで欠くことのできない要素の一つであり、また、これからの文化創造やまちづくりの活動を進めるとき、その基底をなす認識の一つとして考えられてきました。そうした意味からも今回の企画展は、一〇周年を機会に調査・研究を進めて明らかにすべき課題であり、市民に理解をより深めていただきたい内容なのです。

## 1. これまで心がけてきたこと

当館では、この設置目的にもとづいて事業を組み立ててきました。消費経済が行き渡り価値観の変化や工業製品に押されて、地域の人々の営みを伝える生活・生産用具、文書、美術作品な



常設展示ジオラマのキツツォ「蒲原平野」特有の運搬具

どの資料が失われつつあります。当館ではそうした資料の収集・保存を図ってきました。このようにして収集された資料と既存の資料を合わせて調査・研究を進めることから明らかになったことを、館として企画展や講座・紀要などを通じて公表してきました。

例えば「蒲原平野」という地域概念を提唱したことです。建設時から検討し、常設展示にも反映されていますが、低湿地の人々が単に水に苦しみ、水と闘ったと捉えることに疑問を呈し、水辺の環境を活かした生活や生産を営み、特徴的な文化を生み出してきたことを強調してきました。さらに開館と同時に開催された合併による新地域を

どう捉えるかという課題もありました。企画展で遺物や遺跡の分布の検討から信濃川・阿賀野川下流域を一地域としてとらえる試みや、江戸時代の新潟湊と内水面交通で結ばれた地域を新潟湊との関わり方を考えることなどを積み重ねるなかで、次第に「蒲原平野」という地域を設定することの意義が明確になってゆきました。低湿地での農業や開発の在り方を検討する企画展を開催し、その調査研究から、特有の農具や技術を共有する地域が浮き上がってきました。今後は「蒲原平野」の歴史的事象を具体的に検討し、その特性を明確にすることが課題となります。

また、湊町新潟の歴史の変遷を検討するなかから、近代都市新潟への性格転換も検討すべき課題となってきました。新潟町は、開港・明治維新を契機として、商業・流通都市としての機能に加えて、政治・行政・社会・文化の中心都市としての機能を持つようになったという視点を得ました。例えば、この視点から新潟町の花柳界について考えるならば、新潟の花街は、湊町につきものだったというだけでなく、近代以降の都市機能の変化に対応して存立基盤を変化させてきたことで続いてきたことが分かります。今後、この視点を深めて、全国的な新潟県の「裏日本化」のなかで「県都」新潟の果たし

た役割を明らかにすることによって、近代新潟市についてより豊かに語ることができるようになるでしょう。昨年の「牡丹山古墳」の発見も当館事業の成果です。民俗研究者金塚友之丞の収集資料を当館で保存・調査するなかで、金塚によって「牡丹山」と記された土器を埴輪の破片と推定し、それを展示することによって、考古学研究者や地域の人々の関心呼び、諏訪神社での他の破片の表面採集に結びつき、「古墳」の調査が始まりました。地域資料の保存が地域の歴史を掘り起こし、地域の人々のまちづくり活動にまでつながっていった例でしょう。

## 2. いたらなかったこと

しかし、ひるがえって見れば、実現できなかったことの方が目につきます。開館前から当館が主張してきたことに、「場」としての博物館ということがあります。館の活動を基礎に歴史を媒介に、館の職員や研究者や地域の人々、来館者、観光客など様々な人々が交流することを通じて、新たな文化的価値を創造したり、社会活動を進めたり、自己実現を図ったりする「場」となるという方針です。この課題に応えることは充分でなかったように思います。勿論、先に述べた「牡丹山古墳」の

ような例もありますし、多くのボランティアの方が当館で活動されていたり、敷地を活用して地域の方々が事業を行ったり、当館での見学や学習を活動のなかに組み込んでくださる団体などもあります。しかし、当館の積極的な関与・喚起の不足、多様化するニーズへの対応の遅れ、館の物理的な制限や人的な限界などもあって、「場」としての博物館機能は十分に働いているとは言えません。館と市民ともに博物館という「場」を活用する術を考える必要があります。地域を考える、地域で活動する人々からの求めに応じて歴史・文化の情報を提供するだけでなく、地域の人々が博物館という「場」で歴史の価値を発見・創造することができるようにしてゆきたいと思っています。

また、大きな課題となっているのが、常設展示の更新です。新地域の歴史的



市民が牡丹山諏訪神社境内で表面採集した埴輪破片

課題と現代社会の求めている歴史情報に考慮し、新しい展示技術を駆使して、新しい資料に基づいてリニューアルすることです。そのための検討すら行えていません。この検討は、実は常に行っていないければ、現実的にリニューアルが可能となったときに考え始めても対応できないものです。この検討を愚直に続けることが企画展示の企画や展示にとっても重要なことと考えます。

## 3. これから心がけてはならないこと

このように考えてくると、これから当館が心がけるべき課題が見えてきます。これから現在以上に財政事情や人員体制などが厳しくなることが想定されます。安易な途を選べば博物館の事業はどうしても一過性のイベントになってしまふ可能性がります。しかし、イベントでは消費されるのみで、博物館の資源となっていくきません。従来も心がけてきたことですが、ひとつひとつ課題を明確にして、資料を収集・保存し、調査研究を踏まえて、地域の歴史的特性を明らかにし、展示・公表することです。それによって地域の人々や研究者や資料所蔵者とのあらたな絆が生まれ、より深い関係ができていくのです。事業・活動を積み重ねてそれを体系化することが重要です。

さらに「場」としての博物館の機能を充実させるためには、館の発信力を高めて館活動に関する認知度を高める

必要があります。勿論、広報の仕方などに工夫が必要でしょうが、地域や市民が何を問題と見え、どのような活動をしようとしているのか、そのために何を知らなければならないかを把握することでしょう。そうした要望を踏まえて、館が活動し、館に関心を持つてもらおうことが、大切でしょう。その意味で、重要になるのが、地域歴史博物館として、どのように地域と連携した事業・活動が行えるかということだと思えます。施設活用という現在の地域連携だけではなく、博物館の持っている収集・保存や調査・研究、教育普及、展示などの事業・活動そのもので、地域の人々と連携することが重要であり、その連携を発信していく必要があると考えます。

これらはあくまでも仮定ですが、例えば、地域の行事や民俗を保存したいと考えている人々とともに、行事や事業を調査・記録して位置づけを行う。例えば、まちづくりに地域の石造物を活用したいと考えている人々とともに、地域に残る調査・整理・研究を行い、資源として活用できるようにする。例えば、食文化を調査している団体とともに市内全域の行事食の献立を市民から報告してもらってまとめる。例えば、ある家の膨大な資料を市民を募ってデータ化して活用できるようにする、などなど。多くの個人や団体の持つ資金やマンパワーと、当館の保持する専門的な能力を組み合わせ、ともに活動し、その成果を博物館でも公表

## おわりに

簡単にいえば、みなとびあは市民の役に立つ博物館になるといふことだと思えます。市民がみなとびあとかかわること、地域の歴史認識を持ち、深める。そのことが市民の社会的・文化的活動を進める礎となる。単に景色がいい、楽しいことができる、美しいものを見ることが出来る場所としてだけではなく、市民にとって無くてはならない施設、機関、機能として市民に認知されること、今後、みなとびあが生き残り、進化していくために不可欠なことだと思ふのです。

(いとう すけゆき 副館長)



# 新潟市歴史博物館 開館10周年記念特別展 大新潟湊展

新潟市歴史博物館「みなとびあ」では開館一〇周年をむかえるこの年、新潟の「みなと」に焦点を当てた「大新潟湊展」を開催します。本展覧会では、とくに多くの船でにぎわった江戸から明治期の新潟湊が果たした役割と、その特色を紹介いたします。

江戸時代から明治時代の途中まで、国内における大量物資の輸送の主役は船でした。そして運搬される荷品のなかで最大を占めたものが年貢をはじめとする米でした。大穀倉地帯である蒲原平野を後背にひかえ、信濃川・阿賀野川水系の出入口に位置していた新潟町は、河川流通と日本海海運とを結びつける水上交通の要所でした。江戸時代、新潟町は日本海海運の発達・興隆とともに日本海側屈指の湊町となつてゆきます。

現在の新潟市の市街地のかたちは、おおよそ江戸時代にその礎がつけられました。いままも市街地にその佇まいをのこす弓なりの町並、通りや小路による町割は、新潟が湊町として機能してきた歴史に由来しています。通りや小路に沿って掘られた堀には、信濃川や阿賀野川を下ってきた船や、廻船から荷物を積みかえられた小型の船が往来していました。弓なりの町並はかつて

の信濃川の流れに沿うかたちの名残であり、信濃川に接していた大川前通には諸国の船々の取引仲介をつとめた廻船問屋が軒を連ねていました。

新潟湊へ海・川を通じて訪れた船々は、様々な荷品をもたらしただけでなく、そうした荷品の運搬・売買に関する仕事や、船乗たちを「もてなす」仕事を盛んにしました。新潟町の人口をみると、江戸時代全般を通しておおよそ増加がみられ、幕末期の慶應三(一八六七)年には三万人を超えています。また廻船の入港数をみると、すでに元禄一〇(一六九七)年には三五〇〇艘を数えており、江戸時代のはやい段階で日本海側屈指の湊町となつていくことがうかがえます。入船数はその後いったん減少するものの文化四(一八〇七)年に蝦夷地が幕府直轄領となり、箱館への廻米の主要な湊になったことなども影響して文化年間には回復します。その後、入船数は天保元(一八三〇)年にふたたび三〇〇〇艘を超えました。

いままも新潟市内外の神社には、船乗たちが航海の安全を祈り奉納した船絵馬・和船模型等がのこされています。本展覧会でも、こうした船乗たちの名残を一部ではありますが紹介します。



■新潟湊之真景 井上文昌 安政6(1859)年 当館蔵

また新潟町でおこなわれた廻船の取引や運ばれる荷品、町のような紹介をします。

さて天保年間の新潟町は、琉球経由の唐物をひそかに売却するという、薩摩船による唐物抜荷(密貿易)の舞台にもなりました。この唐物抜荷は幕府に露見し、二度の摘発がおこなわれました。この抜荷事件は新潟町が上知されて幕府領となる契機のひとつになりました。

時代がすすみ明治を間近にひかえた頃、新潟湊は日本海側の幕府領であるということが理由のひとつとなり開港



■御買仕切 慶應2(1866)年 江差町教育委員会蔵  
江差関川家によって新潟湊から買い積みされた「浦原御買」250艘の仕切状。

安宅 俊介

五港に選ばれました。こうして新潟は国際港としての歩みをはじめます。このことが新潟市の近代以降の都市の発展の礎となり、そのあり方を方向づけてゆきました。

新潟市の歴史は、この地が「みなと」であったということ抜きに、語ることはできません。この展覧会を機会に、新潟市の歴史的な特徴を「みなと」という側面から再確認して頂ければと思います。(あたか しゅんすけ 学芸員)

## 館長日記

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

### 淳足柵設置とミナト

「大新潟湊展」に寄せて

右企画展口上に「海と川が交わる流通の拠点、新潟湊の江戸・明治」を掲げています。

今春早々、市民から新潟のミナトのルーツについて質問があり、考えてみました。

当館の常設展「三方津の時代」(中世)で、ニイガタ、沼垂、蒲原の三津を紹介しています。その中でも蒲原津は、十世紀の『延喜式』に越後国の湊(国津)と見え、記録が示す新潟最古のミナトです。

しかし質問は、更に古い『日本書紀』大化三(六四七)年足利条の「淳足柵」にミナトがなかったのか、を問うものでした。私は、ミナトの文字がない。柵跡が未発見。ミナトの有り様も不明。しかしミナトを伴っていたに相違ないとする先学の指摘(新潟県史「通史編」三九〇頁)がある旨をお答えしました。以下に些かの私見を加えて記します。

第一、阿賀北の十世紀までの古代遺跡を点にした図から、遺跡が河川や潟などの水辺に営まれた特色が窺われる。これら遺跡より少し前の淳足柵・磐舟柵も内水面で結ばれていたと推定



阿賀北の古代遺跡分布図 (田辺早苗資料提供・土田可奈原図作成 一部加工)

できる。

第二、淳足柵記事にも引き合いに出された「是歳、越国の鼠、昼夜相連りて、東に向いて移り去る。」という、難波遷都での鼠の予兆記事の数日後、「越国言、海畔枯查、東に向いて移り去る。沙上に跡あり。耕田の状の如し。」との記事があり、田を耕した様子と筏による木材搬出を想像させる。

第三、一昨年以來調査された四世紀前半の胎内市城の山古墳が、塩津潟に接していたことが指摘されている。されば、こことつながり、「海と川が交わる流通の拠点」はどこか。やはり信濃・阿賀の河口がクローズアップされ、高志深江国造より昔にこのミナトを掌握した豪族が誰かが問われています。

こうした城の山古墳の時代から古代・中世を経て繁栄に至った江戸・明治の新潟湊の拠点性は長い歴史の賜物といえましょう。

### 施設紹介

## みなとびあはこんなところですよ!

10年目のおさらい

小林 隆幸

みなとびあは新潟の歴史や文化を体感し、楽しむことができる場を創るという構想の下に誕生しました。

その大きな特色は立地です。みなとびあは旧新潟税関庁舎(重要文化財)を中心に整備され、本館の建設をはじめ、新潟税関(国史跡)の史跡整備や旧第四銀行住吉町支店(国登録有形文化財)が移築・復原されました。幕末の開港五港の一つにあげられた新潟港を象徴する場所に立地し、敷地全体が文化財や史跡で構成されています。活動の中心になる建物が本館です。本館は明治四十三年に建設された新潟市役所二代目庁舎をデザインに用いています。

歴史を伝える中心になる場所が、本館内の常設展示室です。日本海に面し、信濃川・阿賀野川の大川の河口をもつ新潟は、水とのかかわりの深い歴史を歩んできました。それをわかりやすく紹介することを目的にしています。そのため、実物資料の数を増やすことよりも、各コーナーのポイントとなる位置に模型やジオラマを展示して、わかりやすさを追求しています。

そして、常設展示の理解を深め、また展示では表現が難しい内容を伝えるための設備がミュージアムシアターです。大型スクリーンに映し出された物語性のある映像は、歴史に裏付けられる新潟の特色をダイレクトに伝えます。

さらに新潟の歴史をテーマを設けて深く紹介しているのが企画展示です。当館学芸員の調査・研究にもとづき、年に四〜五回開催しています。回を重ねる度に新潟の歴史がさらに明らかになり、歴史情報が蓄積されて行きます。みなとびあは歴史に親しみ楽しむことを大切にしています。体験の広場は子供でも歴史を楽しく学べる施設です。ここに展示している資料は本物でも触れて体感することができます。また体験イベントを年間七〇回ほど開催しています。

詳しく学びたい方には、「初心者のための古文書解説講座」や、学芸員が講師の「博物館講座」、第一線で活躍する研究者を招いて開催する「館長講座」などを開催しています。講座では、市民の興味関心に幅広く応えることを心がけています。

また、一人で学習したい方には、情報ライブラリーを利用していただいています。ここでは約四万冊の歴史関係の書籍を蔵書し、学習をサポートするレファレンスの対応もしています。みなとびあは、新潟市民の財産である歴史資料を約一〇万点保管し、後世へ伝えるための保存作業を行っています。歴史資料に向きあい、日々、収集・整理・保管をしながら、市民が歴史を学び・楽しむための様々な活動を行っているのです。

(こ)ばやし たかゆき 学芸員



みなとびあとの出会いと期待

私とみなとびあとの出会いは、建設が決定して間もない、平成十一年のことだったと記憶しています。博物館の建設に先立って、敷地内にある石庫とプレハブに収蔵してあった民俗資料の整理を、「学芸員の資格取得を希望する学生の実習としてやりませんか」という、新潟市歴史文化課の民俗担当学芸員からの声かけがきっかけでした。それから三年間にわたり、夏休みの四日間、三十名前後の学生とともに資料の整理作業を手伝わせてもらいました。

収蔵資料のほとんどは旧市内から集められたもので、建物の中に所狭しとおかれていました。これらの資料は、直接人びとの生活に関わってきた実物資料で、いずれも人びとの生活の歴史を知ることでできる貴重なものばかりでした。人ごとながら、これらを今後どのように活用するのか、いささか心配になりました。

ご存知のように博物館には、資料の収集・整理・保管、調査・研究、教育・普及という四つの大きな機能があり、これにもとづいて博物館では様々な活動が展開されています。

これらの機能を有機的に関連させながら、地域の博物館では市民をその活動にいかについ込み、親しまれる博物館に仕立て上げていくのが重要な課題であると思います。

「親しまれる博物館」とはいうもの

の、市民に認知され、賑わいのある博物館施設とするためには博物館側からの様々な取組が必要になってきます。

みなとびあでの取組の一部は、『帆船成林』(博物館ニュース)やホームページなどで紹介されていますが、地域を活動の主体においたものも多く、地域に目を向けた学芸員の企画力に驚くこともしばしばです。とくに、みなとびあが地域に目を向けた博物館だと強く感じるのには、「活動展示」です。折々に開催される企画展は相応の予算が付くようですが、予算のない中で組み立てられるという「活動展示」の工夫にこそ、博物館の実力が垣間見えると思います。

四回目の今年は、「収集活動」をテーマにしました。収集活動は博物館の大きな仕事です。収集された資料を、整理・分類したうえで紹介しようとする試みは、かつて整理作業を手伝ったときに感じた収蔵品の活用への心配を一掃しました。これは私の感じたほんの一例ですが、市民に目を向けた地域博物館としてのみなとびあへの期待は高まるばかりです。来館者に感動をあたえる、みなとびあの活動を持続されるよう期待しています。

(池田 哲夫 新潟大学教授)

たいけんの場としてのみなとびあ

運営協議会に参加した理由

三年前、地域教育コーディネーターをしていた際に、昔ながらのやり方で味噌を作る機会があったんです。そのときに、子どもたちには様々な体験活動を通して、色々なものに興味を持ってもらいたいと考えました。企画する側の負担は大きいですが、それでも子どもたちの体験活動の場は絶対あった方がよいと思ったんです。また、個人で行うにも場の確保等に限界があります。そこで、子どもたちに体験活動をさせてあげることができるとみなとびあのような場所を大事に守っていききたいと思い、応募しました。

みなとびあの「たいけん」

一言で「体験活動を継続する」と言っても大変だと思えます。他所と連携して大きな事業を行い来館者を集めるのも大切ですが、特色あるワークショップや子どもたち向けの事業もおこなってほしい。そのバランスを取るのとても難しいですし、体験活動の継続はとても地道ですが、是非続けてほしいです。

みなとびあでは、「塩作り」や「わらじ作り」のような大人も楽しめる体験活動もありますよね。私の周りには結構体験が好きな人が多いので、そういう大人向けの体験は絶対喜ぶと思うんです。実際もう少し大人向けワークショップがあれば、子どもだけでなく

大人も楽しめると思います。

また、そういう昔ながらのやり方を体験することで、道具や生活の変化も感じられると思います。おじいちゃん、おばあちゃんがいる人は昔のことを聞けるけど、そうじゃない人が昔のことを知ることは中々難しいですね。そういう人たちが体験活動を通して、昔のことについて知ることが出来る場所であってほしいです。

体験活動の広報

私達のような子育て世代だと、ホームページを見に行くよりも、流れてくる情報を流し見する中でチェックをすることが多いですね。なので、例えばフェイスブックなどのSNSを使ったり広報をしてくれるといいと思います。チラシやポスターにしても、学校やスーパーなど、普段の生活でよく行く場所があると嬉しいですね。それから地域の子育て情報誌に載せれば、子どもと一緒に体験活動に参加する方も増えるのではないのでしょうか。折角の体験活動なので、沢山の方に知ってほしいと思います。

これからのみなとびあ

みなとびあには「ここへ行けば体験活動ができるよ」と言える場所であってほしいです。そしてその活動が、子どもたちがこれから生きていく上での糧になればと思います。

新潟市歴史博物館 運営協議会公募委員 星名 泉さん

新潟の町・グッドなアクション

平成十四(二〇〇二)年子ども達に新潟の町の歴史に興味を持ち、触れる機会になればと、自家製の案内板を日和山や小路に貼り、地図を作り、案内を始めました。

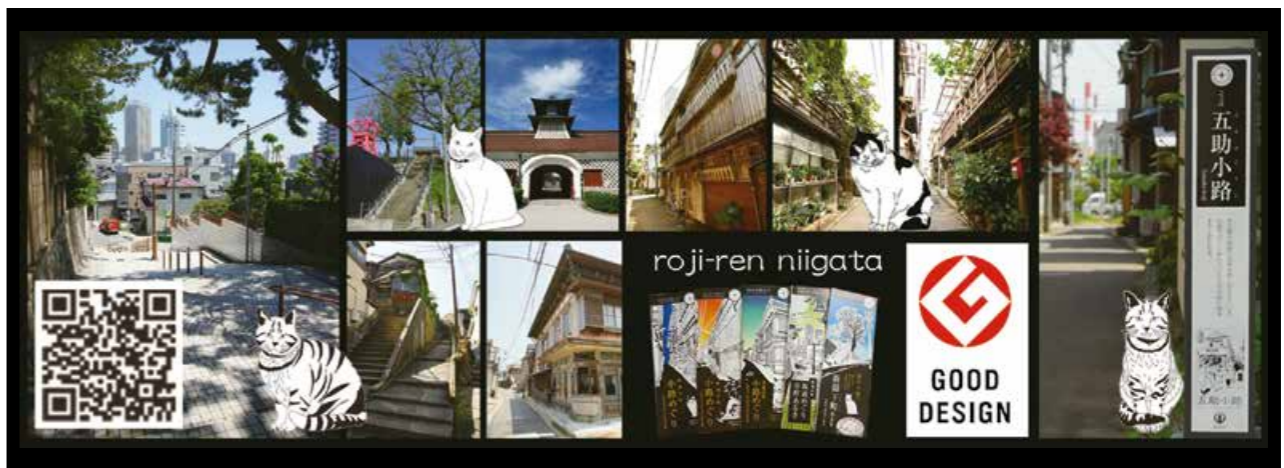
平成十九(二〇〇七)年それらを取りまくる形で、みなとびあ&新潟市歴史文化課の皆さんの協力を得、新潟市と路地連新潟の共同の取り組みとして「新潟の町・小路めぐり」が始まりました。

平成二十(二〇〇八)年より、新潟の町の歴史や風景を、楽しみながら案内する「新潟ステイガイド」さんや、小中学校の総合学習での案内板や地図の活用も始まり、みなとびあから日和山までの、まちあるきルートも、すっかり定番コースとなりました。小路イラストの入ったエコバックや、まつりの灯籠も登場し、自分の町の歴史や風景を、楽しみ、発信するアクションが加速しています。

平成二十五(二〇一三)年には、そんな新潟の活動に対して公益財団法人日本デザイン振興会より、グッドデザイン賞が与えられました。

新潟の歴史を知り、楽しみ、発信する。これからも、みなとびあさん、お世話になります。

(野内 隆裕 路地連新潟)



市民の活動の場としてのみなとびあ

ボランティアに参加したきっかけ

(静子さん、以下静) 柳都大橋ができたとき、橋の誕生祭に参加したんですね。そこで柳都大橋から景色を眺めるときに、税関を中心としたその周辺をもっとよく知りたいとの興味が湧きました。そんな時に「みなとびあ」ボランティアの募集記事を見つけて、新潟を知る良いチャンスだと思い、主人と一緒に応募しました。

(豊雄さん、以下豊) 一緒に共通のボランティアもしてみたいと考えていた時、たまたま「みなとびあ」で募集していた。ボランティアの内容を見て、よし、これでいいこうということになった。早いもので今年で一〇年目を迎えるようになっています。

実際にボランティアをしてみても

(豊) 大勢の人達と接しながら学ぶことが大変楽しい。ここでは学ぶための条件が揃っています。そこが最大の魅力です。ボランティアに関係する資料・書籍が家の本棚の一角を占めるまでになった。宝ものです。一つには、どのような来館者にも楽しみな鑑賞し、よく分かってもらいたい、気持ち良く帰って頂く、ひとりひとりが「得るもの」を持ち帰って頂けるようなボランティアの在り方、接し方はどうあつたらよいかをいつも考えています。た

ゆまない勉強が必要ということでしょうか。

(静) 普通ボランティアと言うと少し手助けをする感じでしょう。でもここは、自分たちでも勉強して、直接来客の皆さんにお話できますよね。そこが他のところとは違う。いくら勉強しても終わらない。そういうことをさせて頂ける場所です、すごくありがたかったなって思います。

(豊) 「みなとびあ」で県内外の人達といろんな交流ができることはとても楽しい。来館者には「一期一会」の気持ちで寄り添いながら接したいものです。

これからどうしていきたいか

(豊) 年が年なので、体調を見ながら無理をせず、手の届く範囲でやる場所までやってみたいと思っています。そのように取り組める場ですし、ありがたいことです。

(静) 身体の調子を考えながら、出来る範囲で長く活動していきたいです。気持ち任せに任せようとした時に「こうしていられないんだ」って気を引き起こしてくれる場所ですし、ここへ来て皆さんと触れ合うことで、私は元気をもらっている。そういう勇気を湧き起こしてくれる場所だと感じますね。

みなとびあボランティアスタッフ 小林豊雄さん・静子さん

